

コミュニケーション教育における 分析心理学的解釈法の位置づけ

北 本 晃 治

はじめに

近年、「コミュニケーション能力」という言葉が、社会における様々な局面において使用されるようになってきている。元来、言語学の間から生じてきた語ではあるが、現在では、言語教育の現場だけでなく、企業が人材に求める最も重要な能力の一つとしても、位置づけられるようになってきており、一般的な共通概念として広く認識されるに至っている。しかしながら、「コミュニケーション能力」が具体的にどのような要素から構成されているのか、そして、その教育方法にはどのような形式が必要とされるのかについては、その言葉が生み出されてきた経緯が特に振り返られることは少なく、その場その場に応じて、恣意的に解釈され、それらに基づいた教育なり訓練なりが、実践されているケースが多いように思われる。

「コミュニケーション能力」には、人間主体に対して付随的な技術に還元できる部分と、個々人の主体そのものの存在から切り離して考えることのできない、より本質的な部分が存在すると考えられるが、社会一般には、前者の要素が取り上げられる場合が多くを占めている、と言えるであろう。このことは、効率を重視する現代の社会システムの中では、当然の帰結であるとも考えられるが、一方で、家庭、学校、社会において現在生じてきている人間関係における様々なコミュニケーション上の問題は、効率主義の教育、訓練によって解決されない部分を多く含むことは、様々なメディアによって、我々の周りに日々提出されている数多くの事例が指し示している通りである。

このように、「コミュニケーション能力」とその本質、そしてその教育方法の問題は、個々人が抱えている実存レベルでの様々な問題解決のためにも、極めて重要なものであると考えられるが、これらに関連した議論は、コミュニケーション学の分野において、限られたものとなっているように思われる。筆者は他（北本, 2000）で、講義形式の授業枠組みの中で、受講者の「コミュニケーション能力」の本質的な部分に働きかける教育方法論について詳述し、特にその心理面での働きの重要性について、すでに指摘している。そこで、本論においては、その理論的課題をさらに深める為に、まず、「コミュニケーション能力」の内面的要素について掘り下げて分析することで、その本質部分を抽出し、次に、その本質部分を活性化するためには、どのような働きかけが必要であるのかについて考察する。そして最後に、上記の教育方法論に基づいた授業枠組に

において、筆者が用いている視聴覚教材の一つの具体例として、映画『LEON』を取り上げ、その分析心理学的解釈を提示しながら、そのような解釈法が、どのように「コミュニケーション能力」の本質に作用するのかについて、考えてみたい。

1. 「コミュニケーション能力」の本質的要素について

一般に言語学の分野において、「コミュニケーション能力」という概念が生み出されたきっかけは、社会言語学者のハイムズが、チョムスキーの言語能力を重視する考え方を批判して、communicative competenceと言う概念を提出したことに始まる、とされている。チョムスキーが言語能力 (competence) と言語運用 (performance) を分けて、前者をその研究対象としたのに対して、ハイムズは、言語と社会との関連性に注目し、その重要性を指摘した。そしてこれを基に、カナールとスウェインが、さらに「コミュニケーション能力」の構成要素として、「文法能力」「社会言語能力」「談話能力」「方略能力」の4つを挙げている (Canale & Swain, 1980)。現在、言語教育の分野で「コミュニケーション能力」といった場合、これらの概念を基礎として成立しているものが多い。

一方、コミュニケーション学の分野では、「コミュニケーション能力」に関する研究を大別すると、レトリック研究と社会科学的研究という2つの視座からのものが考えられる。前者は、「説得行為」に焦点を当てた人文学的アプローチであり、その研究の応用である実践活動としては、スピーチ、ディベートなどが存在している。後者は、因果関係や法則性を重視する実証主義的アプローチであり、この視座において、特に対人コミュニケーションの領域における、他者の視点を重視したワイマンの研究は、重要なものと考えられている (Wiemann, 1977)。

このように「コミュニケーション能力」といっても、そのアプローチの仕方によって、その重点は変化し、末田・福田 (2003) が、

・・・実際のところ、コミュニケーション能力については、研究者たちの間で意見の統一がなされていない。なぜなら、・・・どの視点に立つかによって、コミュニケーション能力をどのようにとらえるかが違ってくるからである。(p.109)

と述べているように、その構成要素は、確定されたものではなく、様々な研究対象とその方法論に依拠していることが分かる。

筆者ははじめに、「コミュニケーション能力」に内包されるものとして、客観的に対象化が可能な技術的側面と、人間存在の本質と切り離すことができない個々人の主体的側面について言及したが、これまでに挙げた「コミュニケーション能力」の構成要素は、主に前者に関するものが多くを占めているように思われる。この点から考えると、前述のように、社会一般におけるこの

概念に対する捉え方が同様であるのは、当然の帰結とも言えるであろう。しかしながら、十全な「総合的コミュニケーション能力」を考える場合、コミュニケーションの道具的、技術的な作用だけでなく、その実存的働きを視野に入れることが、極めて重要になってくるものと思われる。

それでは、コミュニケーション学の分野で、そのような働きを含む「総合的コミュニケーション能力」の構成要素を提示している考え方は、存在しないのであろうか。トレンホーム・ジェンセン（2000）は、「コミュニケーション能力」に関するそれまでのコミュニケーション研究を概観し、「内面的コミュニケーション能力」と「外面的コミュニケーション能力」を区別している。それによれば、前者は、適切なコミュニケーションを行う為の知識を指し、後者は、それを活用する能力を示している。筆者はここで、外から観察可能な「外面的」視座に加え、「内面的」という視座の提出されている点が、「総合的コミュニケーション能力」を考える上で、重要であると考えられる。しかしながら、それが「知識」というレベルで考慮される場合、意識的（表層的）、技術的側面の域を超え出るものではないように思われる。

この「内面的」という概念の内実を、さらに踏み込んで定義しているのが、次の石井（1990b）のものである。彼は、コミュニケーションの構成要素として、精神的活動能力、言語記号操作能力、非言語操作能力、方策的能力、場面条件判断能力の5つを挙げ、この中の精神的活動能力について、以下のように定義している¹⁾。

精神的活動は、価値観、思考形式、感情傾向、コミュニケーションの目的の認識、相手に対する心的態度などをさす。これらはすべてのコミュニケーション活動の基盤を成すものであり、全体として肯定的に機能するときには、コミュニケーション効果も上がると考えられる。逆に否定的に機能する場合は、効果が低下し、決裂状態になることもある。コミュニケーションの問題について論じる場合には、この精神的活動能力を、文化との関連で考えることが重要である。(p.63) (下線部筆者)

ここでは「精神的活動能力」が、「認識」に加えて、「価値観」、「思考形式」、「感情傾向」、「心的態度」を包含することで、前述の「知識」レベルでの内面性がさらに掘り下げられており、コミュニケーション能力の他の4つの構成要素が、技術レベルの能力に還元されるのに対して、それらすべてが基礎付けられる実存（技術のみに還元できない）レベルでの「コミュニケーション能力」を指し示していると考えられる。言い換えれば、「認識」は「思考形式」にそって生成され、「思考形式」は価値観に左右され、「価値観」は、喜怒哀楽、好き・嫌い、快・不快などの「感情傾向」や「心的態度」に、基礎づけられているということになる。これらの下位要素は、表層の意識から深層の無意識的領域へと繋がるスペクトルを構成していると考えられることも可能であろう。

このように見ると、十全な「総合的コミュニケーション能力」を考える場合、この「精神

的活動能力」は、最も根幹の重要な構成要素であることが分かる。

2. 「精神的活動能力」に作用する教育方法について

コミュニケーション学の領域におけるコミュニケーション教育では、理論認知面での教育に加え、その実践面での訓練として、スピーチ、ディベート、オーラルインタープリテーション、異文化トレーニング等が広く行われてきている。これらの活動と、前述の石井が指摘している5つにサブカテゴリー化された「コミュニケーション能力」との関係は、それぞれの活動における訓練内容に応じて、相互に規定されることになる。ここで、その関係性について考えてみると、先に指摘したように、「精神的活動能力」は他の4つの能力の根幹となることから、それぞれの活動の為の動機を形成する部分であるとも言える。そこで、その部分に深く働きかけることができる教育方法が存在すれば、具体的個々の活動と、「コミュニケーション能力」の各構成要素との相互作用が、より十全に進む為の大きな助けとなるであろう。従って、どのようなコミュニケーション活動を前提とするとしても、この「精神的活動能力」に特に焦点を当てた教育方法の開発が、極めて重要になってくるものと思われる。

しかしながら、これまでコミュニケーション学の領域においても、このようなレベルでの内的能力に特に焦点を当てた掘り下げた議論や、さらにはそれらに基づいた教育の機会が、きわめて限られてきたように思われる。その理由としては、他の構成要素が、意識的レベルで操作、対象化することが比較的容易であるのに対して、この「精神的活動能力」は、意識的レベルのみならず、多分に無意識的レベルの要素を含み、焦点化して取り扱うことに困難を伴うという点が挙げられるであろう。

それでは、「コミュニケーション能力」の根幹にあたる「精神的活動能力」に働きかけるための教育方法には、いかなるものが考えられるのであろうか。この焦点化して部分的に取り扱うことが困難な能力に対して、最も豊かな視座を提供しているのは、臨床心理学の領域であろう。この分野では、言わば、「精神的活動能力」に何等かの問題を来したクライアントを対象として、その心理療法が成立しているとも言える訳で、当然そのアプローチは、生きた人間存在の全体性に深く関わるものとなることが多い。従って、心理療法家が、この能力に関わる専門家であるとするならば、それに対応する為の彼ら自身の内的能力は、必然的に高められる必要があることから、彼らの養成過程において取り入れられている様々な訓練法は、健常者におけるコミュニケーション能力の根幹を開発する上でも、大きな役割を果たしうる可能性を含んでいるものと考えられる。

臨床心理学における分析心理学的アプローチでは、心理療法の過程において、「物語」という概念が特に重要視される。すなわち、心理療法の場において語られる、クライアントによる症状と直接、間接に関連する個人的な話を、様々な神話や昔話、おとぎ話等との対比において聴く姿勢が要請されるのである。そこでは、両者の類似性や相違点などが、直接的に心理療法家によ

て、クライアントに伝えられることが目的とされるのではなく、心理療法家が、神話や昔話、おとぎ話等に内在する人間の心理に普遍的な元型的働きに対して、その感性（精神的活動能力）が高められた状態でクライアントに接することによって、クライアントの個人的な語り（日常生活）に、治療的な契機が布置される助けになるという。そして、そのような感性を養成するために、物語を深く味わうことができることと同時に、それらを多義的、象徴的に解釈する能力が必要となってくる。

ここでの問題点は、健常者（教育対象者）の「精神的活動能力」に働きかける為に、このような心理療法的アプローチから、特殊な治療的文脈においてのみではなく、もっと一般的な教育的状況においても有効となるような方法を、いかにして抽出するかということであろう。その点について河合は、教育における「教える」側面と「育む」側面のうち、後者の比重が大きくなればなるほど、その本質は心理療法に極めて接近していくことを指摘している（河合, 1991）。

筆者はすでに他（北本, 2000, 2001）で、コミュニケーション教育における治療的アプローチの役割について言及し、その中で、講義形式の授業形態において、映画の物語を媒介とすることで、これまでに述べてきた「精神的活動能力」を「育む」ことが可能となるような教育方法について論じている。このようなアプローチと心理療法との接点について、前田は、映画を通して臨床心理学を学ぶという試み（山中, 橋本, 高月, 1999）を奨励して、以下のように述べている。

うまく映画を見て楽しめる人は、いい面接者になれると私は思っている。なぜなら、人の心のヒダを読み取るのに、映画ほど優れた教材はないからである。映画でさまざまな感情を味わう、同時にその映像の象徴的な意味をあれこれと解釈してみる、さらに映像から触発されてくる記憶や今の自分の姿と、主人公の体験とを重ね合わせる、そしてそれらを総合して作品の主題を深く理解する・・・・・・こうした映画鑑賞における対象と自分との間のイメージの運動というのは、まさしく心理面接での体験と共通したものである。（ブックカバー折返し）

同様に河合は、

臨床心理学は単に知識のみを吸収しても、何の役にも立たない。自分の生きること、その血肉と結びついたものとして学ばないと意味がないのだ。

と述べ、そのために映画を素材として利用することで、生き生きとした体験を伴いながら学習ができる点を、大学の講義にもっと取り入れるべきであると指摘している（ブックカバー折返し）。

よい映画には、神話や昔話、おとぎ話等と共通するモチーフが存在することから、物語解釈の

格好の訓練材料となると言えるであろう。そしてさらに、このようなアプローチは、臨床心理学の領域のみで有効であるだけでなく、もっと一般的な教育的文脈においても機能し、コミュニケーション能力の開発のために、その根幹であると考えられる「精神的活動能力」に働きかける上で、十分に応用可能なものであるように思われる。それではその点について、以下の章で、筆者の用いている具体例を挙げて考えてみよう。

3. 「精神的活動能力」養成の為の教材としての映画

この章では、筆者が「精神的活動能力」に働きかけることを目的として、講義形式の「コミュニケーション論」という授業において使用している教材の一例として、映画『LEON』を取り上げて考えてみることにしたい。はじめに、その物語の分析に必要な概念的枠組みについて考えてみよう。

3.1 分析心理学的解釈法の概念的枠組み

ユングは人間の心を、意識、個人的無意識、普遍的無意識の3つの層に分けて考えている。彼の考え方の特徴は、心の無意識的側面を、個人史の中で形成され、その内容が忘却あるいは抑圧されている「個人的無意識」だけでなく、さらにその基底部分に、神話的なモチーフや形象から成り立っており、人類が共通してもつ表象可能性の遺産としての「普遍的無意識」の存在をも認める点にある。そして、後者の表現内容は、神話やおとぎ話、夢、精神病者の妄想、未開人の心性などにも共通して認められ、そこに集約的に共通して見られる型を、「元型」と呼んでいる(河合, 1967, pp.94-95)。

ここでは、その中から、次に取り上げる物語の解釈に必要であると考えられる「ペルソナ」「影」「アニマ」「自己」という4つの元型について、河合(1967, 1976)を参照しながら考えてみよう。

分析心理学においては、意識の主体である自我が、無意識内に存在する様々な元型的働きとの関係において規定されることになるが、それらの中で最も重要とされる元型は「自己」であろう。この概念について河合(1967)は、

その意識を超えた働きの中心として、ユングは自己なるものを考えたのである。自我が意識の中心であるのに対して、自己は意識と無意識とを含んだ心の統合の機能の中心であり、そのほか、人間の心に存在する対立的な要素、男性的なもの、女性的なもの、思考と感情などを統合する中心とも考えられる。(p.221)

と説明している。そしてさらに、心理療法の目的として、

個人に内在する可能性を実現し、その自我を高次の全体性へと志向せしめる努力の過程を、ユングは個性化の過程 (individuation process)、あるいは自己実現 (self-realization) の過程と呼び、人生の究極の目的と考えた。そして、われわれが心理療法において目的とするところも、結局はこのことにほかならないのである。(p.220)

と指摘しているところからも、この概念が様々な元型の中でも、それらの根幹となるものと考えられていることが分かる。

分析心理学における心理療法では、この「自己」という元型の働きが、「癒し」の原動力と考えられるが、その働きへと至る過程において、他の様々な元型的働きが、あるときは対立的に、そしてまたあるときは相補的に、意識の主体である自我に対して布置されることになる。このような視点から見ると、意識的な働きを掌る自我は、家庭的関係、社会的関係といった外界に対する適応だけでなく、心の内界に存在するとされる様々な元型的働きに対しても、適切な対応を迫られていることになる。

この自我の外界、内界に対する働きに作用しているのが、それぞれ、「ペルソナ」、「アニマ」と言われる元型である。それらについては、以下のように説明されている。

人間は外的適応を誤って神経症になるのみならず、内的適応をおろそかにしても、神経症に悩まねばならない。このような点に注目して、ユングは、われわれは外界に対してのみならず、内的世界に対しても適切な態度をとらねばならないとし、それらの元型として存在する根本態度を考え、外界に対するものをペルソナ、内界に対するものをアニマと呼んだ。ここにいうアニマが、ユングにとっては、こころと同義語である。つまり、元型として無意識内に存在する、自分自身の内的な心的過程に対処する様式、内的根本態度を「こころ」と考えるのである。(p.196)

人間の外界での活動は、必然的にそれによって喚起された内界での心の働きを引き起こし、またその逆も真であることから考えると、この二つの元型が、相互にその働きにおいて、何らかの関係性を有していることが当然考えられる。それらの特徴と関係性については、以下のように述べられている。

ペルソナとアニマは相補的に働くものである。男性の場合であれば、そのペルソナは、いわゆる男らしいことが期待される。彼の外的態度は、力強く、論理的でなければならない。しかし彼の内的な態度は、これとはまったく相補的であって、弱弱しく、非論理的である。実際、われわれは非常に男性的な強い男が、内的には著しい弱さをもっていることを知ることがよくある。このように一般的に望ましいと考えられる外的態度、ペルソナから閉め出さ

れた面が、こころの性質となるのであり、これが心像として現れるときは、女性像として現れることになる。(p.197)

このことから、両者が自我に対して相補的に働くものとして位置付けられていることが分かるが、これらの元型は、ペアで考えるならば、男性性、女性性に一旦分離させられた心的働きに統合をもたらそうとする力動性を、その関係性の中に内在しているともいえ、そのお互いの相補性は、心的全体性の回復に、必要不可欠なものと考えられるであろう²⁾。

それでは、最後に残った「影」という元型とは、どのようなものであろうか。まずその定義を確認しておこう。

影の内容は、簡単に言って、その個人の意識によって生きられなかった反面、その個人が容認しがたいとしている心的内容であり、それは文字どおり、そのひとの暗い影の部分をしている。われわれの意識は一種の価値体系をもっており、その体系と相容れぬものは無意識下に抑圧しようとする傾向がある。(p.101)

このような意識のもつ価値体系に組み込まれなかった「影」、すなわち、個人の自我にとって否定的に見える生き方や考え方に対して、その中に肯定的な意味を見出すことで、自我に統合していくことが、心理療法における重要な課題の一つであるとされている。これは新しい価値体系の創造過程であるとも言えるが、そのことを通して、先に述べたさらに深層の元型、「こころ」と同義とされる「アニマ」へと導かれることになる。しかしながら、この過程は両義的で危険を伴う場合もあり、その点については、次のように言及されている。

このような創造過程のなかで、意識と無意識という二者の対立として述べたことを、もう少し詳しく見てみると、・・・自我とアニマとの間に影が介在するというパターンが存在していることが解る。・・・つまり、影はアニマへと至る道の中に存在している。・・・影が自我の存在をそれほどもおびやかさないときは、それは一種の仲介者的役割を果たす。道化が主人公と恋人とを結びつけるのに役立つように。しかし・・・影が肥大してくると、自我もアニマも影の中に包まれて、区別がつかなくなってくる。ここで影の力がますます強くなると、自我の破壊にまでつながってしまうわけである。ここに創造過程の恐ろしさがある。創造のためには影を欠かすことができない。(河合, 1976, p.248)

このことから考えると、「影」の働きについては、その創造的側面と、破壊的側面の両方を認識する必要があり、その捉え方には十分な注意を要することが分かる。

それでは、ここで取り上げた「自己」「ペルソナ」「アニマ」「影」という4つの元型のもつ一

連の働きの中で、映画「LEON」という物語を考えると、どうなるのであろうか。まず、その物語のあらすじから見よう。

3.2 映画『LEON』のあらすじ

レオン（ジャン・レノ）は、誰よりも確実、迅速にその仕事をこなす超一流の殺し屋で、女、子供は決して殺さないことを信条に、ニューヨークの街に蔓延る曰く付きの人々を対象として、その仕事をしてきた。彼は安アパートに住み、一日に2パックの牛乳を飲むことと、肉体トレーニングを欠かさない孤独な中年男で、その唯一の心の慰めは、決して大地に根を張ることのない鉢植えの観葉植物を、まるで自分の分身のように、大切に世話することであった。ところがある日、それまで人付き合いの全くなかった彼のところへ、同じアパートに住む12歳の少女マチルダ（ナタリー・ポートマン）が助けを求めにやってくる。戸惑いながらも部屋へ入れて話を聞くと、彼女の父親の関わったヘロインの問題で、ある麻薬中毒者（ゲイリー・オールドマン）の率いる一派に、たった4歳だった最愛の弟も含めて家族を皆殺しにされ、自分の命も危ないので暫く匿ってほしいという。さらにレオンが殺し屋だと知ると、自らも殺し屋になって仕事がしたいと懇願する。自分の正体を知った少女を殺すことも追い出すこともできず、奇妙な共同生活が始まるが、次第に二人の関係は、親子とも恋人ともつかぬ不思議な雰囲気になっていく。そんな中で、レオンはマチルダに殺しの理論と技術を教え、マチルダは教育のないレオンに読み書きを教えた。レオンを殺し屋として育て、その仕事の仲介をしてきたトニー（ダニー・アイエロ）は、彼の様子の変化を知って不吉な予感を覚える。そんなある日、家族を殺した男の名はスタンスフィールドといい、麻薬捜査官であること、そしてその彼のオフィスの場所をつきとめたマチルダは、レオンに殺しを依頼するが、仕事の荷が重過ぎるし、復讐はよくないと断られる。彼女はレオンの留守中にひとりで復讐へと向かうが、逆に捕えられてしまう。そのことを知ったレオンは、スタンスフィールドが偶然外出中のオフィスに飛び込み、彼の一味を瞬時に皆殺しにして、マチルダを救い出す。このことに怒り狂ったスタンスフィールドは、これまで殺しの仕事の依頼相手であったトニーを通じてレオンの居場所を突き止め、所轄の全警察官を率いて、建物を完全に包囲する。レオンは絶対に離れないと泣くマチルダに、必ず生きて落ち合えると説得し、大切にしている観葉植物を委ねて密かに逃がす。レオンは傷つきながらも、何とか警察の特殊部隊のひとりに変装して外へ逃げようとしたその瞬間、唯一そのことに気づいたスタンスフィールドに背後から撃たれる。瀕死のレオンに、嘲るように言葉をかけるスタンスフィールド。レオンはそんな彼に、マチルダからの贈り物だといって、体に巻いた爆弾の点火リングを抜いて手渡し息絶えるが、その瞬間にスタンスフィールドも爆死させられてしまう。レオンから彼自身に万一のことがあった場合、預けてあるこれまでの仕事の報酬をマチルダに渡してやるように頼まれていたトニーであったが、彼にはそのような気持ちは毛頭なく、彼を頼って訪れたマチルダが、自分を殺し屋として雇ってくれということ、僅かばかりの小遣い銭を与えて、冷たく追い払ってしまうのであった。一

人ぼっちになったマチルダは、真実を打ち明けて養護施設に入る。そして、レオンから託された鉢植えの観葉植物をその庭の大地にしっかりと植え、“I think we'll be OK here, Leon.” というのであった。

3.3 物語の分析

神話や昔話、おとぎ話等の分析心理学的解釈では、その物語の状況や登場人物を、心の中の元型的な働きの現れとして解釈する。すなわち、物語の展開を、個人の中の様々な心理的な要素間で繰り広げられる象徴的運動として理解するのである。このような視点から映画『LEON』という物語を見てみると、どういうことが言えるのであろうか。以下に、これまでに指摘した元型という分析心理学的概念の枠組みを用いながら考えて見よう。

この物語の主要登場人物を挙げるとすると、レオン、マチルダ、スタンスフィールド、の3人ということになるであろう。これらの人々の関係を中心に、特にレオンとスタンスフィールドの特徴を対比的に見てみると、以下のような点が浮かび上がってくる。

レオン	スタンスフィールド
悪の組織（殺し屋）の中の善人	善の組織（警察）の中の悪人
マチルダに愛されている。	マチルダに憎まれている
トニー（殺しの仲介人）に利用されている。	トニー（殺しの仲介人）を利用している。
女、子供（未来の命の可能性）は殺さない。	女、子供（未来の命の可能性）を殺す。
ミルク（原初的合一性の象徴）を飲む。 （体を養う液体）	麻薬（原初的合一性の象徴）を飲む。 （体を害する粉末）
スタンスフィールドに殺される。	レオンに殺される。

このような対比から分かるのは、レオンとスタンスフィールドが、あたかも陰陽の大極図のように、相対する存在として描かれていると言うことである。ここで、物語の中心である主人公のレオンを、意識の主体である「自我」の象徴と考えると、その存在はきわめて両義的であることが分かる。彼（自我）は、街にのさばる悪玉達に対する殺しを請け負う「大義を持つ殺し屋」という「ペルソナ」を社会に対して持っている一方で、マチルダという愛の対象を持つに至る。マチルダは、レオンの「女、子供はやらない（殺さない、関わらない）」というモットーで続けることのできた殺し屋という「ペルソナ」に、バランスをもたらすべく現れた少女（女かつ子供）であり、まさに「アニマ」の象徴であると考えられる。さらに、二人の出会う経緯にスタンスフィールドが関係していることで、彼が正に「影」という元型の象徴であることが分かる。すなわち、「自我」（レオン）の働くフィールドである意識（大義ある殺し屋社会）の持つ価値体系に相容れ

ぬもので、意識下に抑圧された（接触することから逃れた）存在であると考えられる。

これらのことをまとめると、前々節で考察した元型間の相互作用が、物語の中に端的に表現されていることが分かる。すなわち、「自我」（レオン）の外界に対応する「ペルソナ」、（大義を持つ殺し屋）、そしてそれによってもたらされた「自我」の偏った一面性に相補作用をもたらすべく現れた、内界に対応する「アニマ」、（マチルダ）、そして両者の出会いを結果的に導いた「影」、（スタンスフィールド）という図式が浮かび上がってくる。

ここで、「自我」（レオン）のもつ「ペルソナ」（大義を持つ殺し屋）が、それ自身相反する意味を内包することから、それによって形づくられる意識の価値体系から抑圧される「影」（スタンスフィールド）が、大義を持つ警察という組織に属しながら、自らの快樂のためには手段を選ばず、女、子供をも平気で殺害する極めて非道な麻薬捜査官として、やはり相反する意味を担うべく描かれているところは重要であろう。そして、この「影」の力が余りに強大になりすぎた時、それは「自我」と「アニマ」の仲介役を超えて、両者を共に覆いこみ、「自我」の破壊へと向かうと言うことも先に指摘した通りであり、この物語の中で、レオンとスタンスフィールドの死の同時性というところに集約的に表現されている。

それでは、この物語の中で「自己」と言う元型は、どのような作用をなしたと考えることができるのだろうか。マチルダは最後に、レオンが大切にしていた観葉植物を大地にしっかりと植え、「もう私達はここで大丈夫よ、レオン。」と言っている。ここには死と再生のモチーフが存在している。「自我」（レオン）と「影」（スタンスフィールド）は、それぞれが極めて屈折した存在であるがゆえに、もはや無意識下で共存することは不可能となり、必然的な両者の死が訪れるが、その本質は人間的感情レベルの相克と死を超越したレベル（植物レベル）で保存され、新たな生存の場（養護施設の大地）に「アニマ」（マチルダ）がしっかりと植えたところに、「自己」（全体性の象徴）の働きを考えることができるであろう。象徴的に考えるならば、一見悲劇的な結末での「自我」と「影」の死が、心理的活動全体の終焉を意味するのではなく、それらを超えた働きが継続的に存在しており、そこに新たな展開（マチルダに内在化されたレオンとの関係性に象徴される心的働き）が暗示されているとも言えるであろう。

3.4 神話作用と「書く」行為を通じた個人内コミュニケーション

これらの解釈を、映画を参照させることなく提示するだけであれば、それは単なる知的理解の域に留まり、無意識内に留まっている個人の様々な心的働きに対して、根本的な反応を促すことにはならないであろう。しかしながら、映画を見て物語を実感し、心を動かされるという体験の上にその知識を成立せしめることに成功するならば、そのことは、個人に自分自身の体験を振り返り、それに基づいた個人的神話を考えようとする一つの契機となる可能性が生じてくるように思われる³⁾。そしてそのことは、正に先に述べた「精神的活動能力」活性化の為の方法論に通じるものということになる。

それでは、個人的な神話を考えるとは、どのようなことであろうか。神話とは、古代の人々が、自然環境などの外的な現象のみでなく、それらが彼らの心の内部に与えた動きをも述べようとしたものであり、両者の主客分離以前のものを生き生きと記述しようとした試みであると考えられ、事物を基礎付ける働きがあるという（河合, 1967, p.98）。そしてさらに、神話化するということの意義については、

神話というものは、それに対応する外的な事象が存在したことも事実であるが、そのみが神話を決定するものではなく、それと同時に、それに伴う内的体験が重要なものであることがわかる。われわれは、外的な事象に対して、「なぜ？」と尋ね、それを合理的な知識体系へと組織化してゆくと同時に、その底においては、心の内部に流れる体験を基礎づけ、安定化させる努力、すなわち、神話を作り上げることが行われているのである。（p.99）

と河合が述べているように、外的な事象に対する認知作用（理解）は、それに対応して生じてくる心の内的働きが、自分自身の全存在との関係においてしっかりと定位すること（納得）を通じて、真に意味をもったものとなると言えるであろう。そしてこの時、個人の内部で生じているのが「事物を基礎付ける」神話作用ということになる。

筆者が行っている教育で、受講者がこの神話作用を通じてそれぞれの「理解」と「納得」を編み上げるための方法が、「書くこと」を軸とした自己対話作用による個人内コミュニケーションということになる。そのために授業では、映画の視聴とあわせて⁴⁾、毎回提示する課題に対して、レポートの作成を義務付けている。その課題は2つの質問から成り立っており、一つは、外在的な対象としての映画の物語内容に対する解釈の問題であり、いまひとつは、その解釈内容との関連における自分自身に内在的な問題の考察である。

それでは、この章で取り扱っている映画「LEON」に関する課題を取り上げて考えて見よう。この映画に対する一つ目の問いは、『『女、子供はやらない。（殺さない、関わらない）』というレオンの『職務上』のモットーは、レオン自身のどのような考えに基づくものと思われるか。』であり、二つ目は、「自分自身が何かを行うときに、どのようなモットーをもっていると思うか。そしてそれはどのような考えに基づくのか。」というものである。前者の問いには、映画の中で描かれているレオンの過去の経験や現在の言動（データ）から、非情の殺し屋社会でありながら、そのような「職業倫理」（主張）を形成するに至った過程を、理論立てて推測すること（論拠）が求められることになり、客観的に説得力のある論考法の訓練となる。一方後者の問いでは、前者の問いによって意識化された接近方法が、自分自身に差し向けられ、そのことによって、自分自身が普段為している言動に関して、それらを制御している規律を意識的に確認する作業が行われることになる。

この際に重要なのは、外在的な事象に対する接近法とその深さは、個人に内在的な事象に当て

はめられる場合にも、同様レベルのものとなることが多いということであろう。たとえば、一つ目の問いに対して、「レオンは本当は優しい人で、女、子供を殺したらかわいそうだと思うから。」という比較的直截的な性格レベルでの解釈を為す者であれば、二つ目の問いである自分の行動規範に関して、「いつも笑顔で明るくふるまうこと。その方が、気持ちがよいから。」といったような類似のレベルの内容になる場合が多いように思われるし、また、一つ目の問いに関して「女、子供に対しては、殺し屋として非情に徹しきれず、職務履行上の妨げとなると考えるから。」という所与の条件と性格との関係性レベルで見ると、自分のモットーについても、「できるだけ友人を大切にすること。自分一人で活動できるほど、私は強くはないから。」といった、やはり前問に対すると同レベルでの論述を為すものが、多く存在するという点が指摘できるであろう。

このような受講者の意識的働き（思考法）に対して、前節で指摘した分析心理学的な解釈法は、どのような意味を持つのであろうか。そこで見られたのは、心に内在する元型的働き同士の相互作用と、それらを象徴する物語の登場人物との間の関係性であり、両者の対応によって示されているのは、「対立物の結合」や「死と再生」といった神話的モチーフであった。そこで、映画を見て心を動かされ、物語についての問いを考え、さらにその内容を自分自身に反映させることに加えて、このような心理学的解釈法にふれることの意味とは、一見偶然に見える物語の展開における神話的構造⁵⁾を知ること、前述の2種類の問いの答えに対して、新たな意味づけの過程を辿ることのできる可能性が開かれるということであろう。そしてそのことは、物語の展開に関する認識枠組みの広がりをも自分自身に対しても反映させる契機ともなり、同様に一見偶然に展開しているかに見える自分自身とその身の回りの様々な事象に通底する働きに対して、開かれた視点を養うことができるということになる。先ほどの一つの例でいうならば、「いつも笑顔で明るく振舞うこと（モットー）」が、何らかの自分自身の心的要素に対する補償作用ではないかと問うことで、それまで、自分自身が偶然として余り意識してこなかった身の回りの出来事（例えばある特定のグループとは接しないようにしていること等）や内的感覚（笑顔でいることに疲れている自分等）に対して、より深いレベルでの納得が生じてくる可能性が開かれるということである⁶⁾。

このように、自分自身の言動やその規範が、意識的に意味づけられた理由だけではなく、何らかの自分自身のあり方を防衛、あるいは補償しようとする無意識的働きによる可能性はないかと問うことで、個人をより根源的な元型的働きとの関係において基礎付け、安定化させる契機が生じてくることになる。そして、そのような契機によってもたらされるのが、この節のはじめに指摘した個人神話創造の可能性であり、それこそが、「精神的活動能力」の本質でもあるということになる。

4. おわりに

以上本論では、コミュニケーション能力の根本的要素として、「精神的活動能力」の重要性を指摘し、その養成のために、映画と分析心理学的解釈法を導入することで、個人の中の神話作用を活性化することを目的とした教育方法論について考察した。

リオタール（1984）は、近代を支えてきた真理、国家、科学などの「大きな物語」の喪失と、その状況を補償する「小さな物語」の乱立する現代の状況について指摘しているが、人々の存在を内在的な神話作用によって、これまで集合的に基礎づけてきた「大きな物語」を、単純素朴に信じられなくなってしまった現代の状況下では、人々は自分自身の存在を基礎づけ、安定させるために、各自がそれぞれに「個人の物語」を紡いでいくことを余儀なくされているように思われる。物質的な豊かさに満たされている現代社会にあっても、本質的な関係性の希薄さから、多くの人々が心に抱いているように思われる空虚感は、そうした状況からもたらされているともいえるであろう。

コミュニケーション教育とは、様々な対象との関係性を築く能力を養成することを目的としていると考えられるが、このような時代においては、外在的な対象との間の技術的コミュニケーション能力の開発だけでなく、個人個人の存在を内的に基礎づけ、安定させるためにも、コミュニケーション能力の根幹であると考えられる「精神的活動能力」をしっかりと育成することが重要となってくるであろう。そしてその為には、内的基礎づけの為の源泉である個人に内在する神話作用を掘り起こし、それを教育の中にしっかりと位置づけるための教育方法論の開発が急務となってくるように思われる。本論はそのような試みのひとつであったが、今後もこのような視点から、その教育効果についての実証的研究を含めた教育研究の積み重ねが必要であろう。

注

- 1) 石井は他（1990a）で、コミュニケーション能力についてこれまでに提出された種々の定義と構成要素を、「内面的活動能力」「記号操作能力」「戦略的能力」「場面適応能力」「総合制御能力」の5つにまとめているが、本論で言及している「精神的活動能力」は、この中の「内面的活動能力」に相当すると考えられる。
- 2) 女性の場合であれば、「ペルソナ」と内界に存在する元型との関係は、男性の場合と対称的なものが期待されることになり、その内界との関係性を掌る元型は、男性の「アニマ」に対して「アニムス」と呼ばれている。
- 3) このような元型的枠組みを物語に機械的に当てはめて考えるだけでは、それは単に認知レベルでの学習に終わってしまうであろう。個人神話創造の契機となるのは、個人が映画を観て心を動かされる体験を持ち、その上にこのような解釈に触れることで、ある種のサプライズを伴う新たな納得が訪れた場合に限られ、その時に初めて、自らの意味づけの過程に新たな視点を開くことが可能となってくるように思われる。そしてそ

のためには、それを提示する教員との関係性や、受講者が十分に自分自身の内界をさぐることができるような保護された場に対する配慮が必要となってくる。詳しくは、北本（2000）参照のこと。

- 4) 授業における映画の視聴時間は、受講者のレポート紹介、解説等の授業展開の妨げとならない程度で、かつ、受講者が心理的に十分インボルブされるのに十分な時間を考慮している。
- 5) レオンの「女、子供はやらない（殺さない、関わらない）」というモットー（職業倫理）が、レオンの本質的優しさであると同時に、レオンの「大義ある殺し屋」という「ペルソナ」を維持するためには、必要な条件でもあること、そしてそのことが、心の全体性へと導く「アニマ」の象徴としての少女マチルダ（女かつ子供）や、その「ペルソナ」を生きることによって生じてきた対立物としての「影」の象徴であるスタンスフィールドとの関係性を、必然のものとしているということ。すなわちレオンが意識的に意味づけているその理由の背後に、そうせざるをえない必然的、無意識的理由が存在しているということを指している。
- 6) 勿論、このようなアプローチは、それなりに安定している自分自身に対する意味づけのあり方を、根底で揺さぶるものであることから、それを受けとめる用意や意志のないものに対して、唯一の解釈法として強要されるべきものではないであろう。それをどのように受けとめ、評価するかは受講者に任されている。

引用文献

- 石井 敏（1990a）「87 言語能力のほかに何が必要か—コミュニケーション能力」古田暁（監修）『異文化コミュニケーションキーワード』第8章「異文化理解とコミュニケーション技能」188-189頁、有斐閣。
- 石井 敏（1990b）「文化とコミュニケーションのかかわり」鍋倉健悦（編著）『異文化コミュニケーションへの招待』第2章41-65頁、北樹出版。
- 河合隼雄（1967）『ユング心理学入門』培風館。
- 河合隼雄（1976）『影の現象学』思索社。
- 河合隼雄（1991）「子供と心理療法」『季刊精神療法』第17巻、第2号、金剛出版。
- 北本晃治（2000）「コミュニケーション教育と教育パラダイム—「書くこと」を軸とした有機的コミュニケーション教育—」『スピーチ・コミュニケーション教育』第13号、1-16頁、日本コミュニケーション学会。
- 北本晃治（2001）「コミュニケーション教育における治療的アプローチの役割」帝塚山大学短期大学部紀要、第38号、19-28頁。
- 末田清子・福田浩子（2003）『コミュニケーション学：その展望と視点』松柏社。
- 山中康裕・橋本やよい・高月玲子（1999）『シネマのなかの臨床心理学』有斐閣。
- Canale, M., & Swain, M. (1980). Theoretical basis of communicative approaches to second language teaching and testing. *Applied Linguistics* 1. 1-47. London: Oxford University Press.
- Hymes, D. (1972). On communicative competence. In J. B. Pride & J. Holmes (Eds.), *Sociolinguistics*, (pp.269-293). Harmondsworth, UK: Penguin Books.
- Liotard, J. F. (1984). *The Postmodern Condition: A report on Knowledge*, Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Trenholm, S., & Jensen, A (2000). *Interpersonal communication*. Belmont, CA: Wadsworth Publishing Company.
- Wiemann, J. M. (1977). "Explication and test of a model of communicative competence." *Human Communication Research*, 3, 195-213.